

「ロシアとウクライナの問題についてどう思いますか？」—私にそう質問したのは、中学3年の男子生徒だった。

私は、長崎原爆の被爆者から体験を継承した「交流証言者」である。5年前から全国の学校などで被爆者に代わり、被爆体験や平和への思いを伝えてきた。これは今年の4月中旬、兵庫県姫路市の中学校で被爆体験講話をしたときに受けた質問だ。

体育館で講話を聴く2・3年生と先生方、総勢150名の視線が私に注がれる。

「私は、この問題は単なる戦争ではなく、核問題が絡んでいるところがややこしいと感じています」。タイムリーな話題だが、危機の本質をどう捉えたらいいか悩んでいた私にとっては不意を突く手ごわい質問だった。迷いながら言葉が続ける。

「話の中で触れたとおり、ロシアは核保有国です。そしてウクライナは核保有国でした。ですので『ウクライナが核兵器を手放さなければ、このようなことは起きなかった』という意見もあります」。結論をどうしよう…頭が真っ白になりながら、生徒達の顔を見渡した。

結局、学生時代から学んできた核問題の知識や平和活動の中で深めてきた思索を総動員して、なんとかそれらしく回答を絞り出した。

「これで答えになっているのでしょうか？」私の問いかけに彼はうなずいてくれた。しかし、本当に彼が納得するような回答ができたとは思えず、長崎に帰ってきてからもモヤモヤが残っていた。

「ウクライナ危機には核問題が絡んでいる」自分自身が発した言葉をきっかけに、そしてあの時のモヤモヤを晴らすべく、改めて核問題の本質を探りたいと思った。

私が継承している被爆者の吉田勲さんは、5歳になる直前に被爆。当時の悲惨な記憶を思い出すまいと、48年もの間、ご家族にすら自身が被爆者だと伏せていた。しかし晩年は、ご逝去の日まで国内外での講話や被爆遺構ガイドなどに日々尽力していた。

人生を沈黙から行動へと転換させたのが『原水爆禁止宣言』というものだった。この宣言では、核兵器は絶対悪だと断罪し、核抑止論も人間が持つ恐怖心や相手(国)に対する不信感を正当化するものだと主張している。

一方で、核兵器の存在を容認する意見もある。その代表が核抑止論だ。ウクライナ危機で日本でも核共有を議論するべきだとの声もあがった。

唯一の戦争被爆国として核の惨禍をよく知る日本でも、核抑止論や核共有論を支持する意見があるのはなぜだろう。私は、ここに何か核問題の本質に迫るヒントはないかと考えた。

思索を深めていたゴールデンウィーク明け、22名分の講話の感想文が届いた。読み進めていると、予想もしなかった一文に目が留まった。

「正直、日本も核を持っていてもいいと思う。攻撃や戦争のためではなく抑止力としてだ。これは、被爆していないからこそできる考え方であり、被爆した方々には難しいと分かっている」。

この意見には賛否両論あるだろう。しかし私は、この生徒は単に「核兵器はダメなんだ」で終わらせず、素直な思いをよくぞ書いてくれたと思った。

「被爆者には難しいと分かっている」とあるように、核廃絶が理想と知りながらも核抑止論も分かる…私はそう受け取った。

私は、核兵器は二度と使われてはならないと思うし、核なき世界が理想だと思う。しかし核の脅威は今も存在し、核抑止論も支持されている。したがって、核なき世界を叫ぶだけでなく、核兵器の存在理由や国防のあり方という根本的な部分に再度立ち返ることも必要ではないだろうか。

そのために私は証言者の立場を生かし、被爆の実相や被爆者の思いを伝えると同時に、核問題や平和について様々な角度から伝え、聴衆と対話する場を作っていきたい。

これからも講話は続く。もし再びウクライナ危機について問われたら、私はこう回答する。

「この問題が私達に教えていることは2つあると思います。1つ目に、遠い国での出来事が私達の生活に直結しているということ。2つ目に、軍事力と国同士の協調・対話はどちらも等しく大事だということです。

1つ目について、ウクライナ危機により、ウクライナから小麦粉や食用油の供給が不足しています。そしてロシアからは原油の供給不足により、電気やガス、ガソリンが値上がりしています。これらは暮らしに欠かせないので、供給が少なくなったり値段が高くなったりすると、私達も、それから家族も困ってしまいますよね。

そして2つ目について、平和を願うだけでは何も変わりません。どの国にも言えますが、本気で国を守るなら他国と対等に話せる力と、万が一の時には国民を守るための軍事力も必要だと思います。これは決して他国を攻撃したり、戦争したりするためのものではありません。

ウクライナ危機は、私達の暮らしや国のあり方を問いかけていると思います。多角的・多面的に問題を見つめつつ両国の歴史も鑑みながら、危機の本質や様々な意見・見方の背景を一緒に追究しましょう。それが、今いる場所で私達にできることだと考えます」。

質問をくれたあの彼に聞きたい。

「これで答えになっているのでしょうか？」